

保育教育における手遊び歌についての一考察

笠井 キミ子 久原 広幸 坂田 万代 横山 浩平

A Study of Songs with Motions in Nursery Education

Kimiko Kasai Hiroyuki Kubara Mayo Sakata Kohei Yokoyama

(2014年11月28日受理)

はじめに

保育者養成校において声楽の指導をする中で感じることは、特に手遊び歌に興味関心が深まっていることである。そのように感じる1つの例としては、保育園(所)実習、幼稚園実習を終えた学生と懇談すると、多くの新しい手遊び歌を紹介したり、手遊び歌の新しい振り付けを披露したり、と手遊び歌を楽しむ姿を見せてくれることからである。その時、私たちは手遊び歌の限らない発展と展開に驚くのであるが、またその楽しさを改めて実感する。そうしたことから、子ども達との触れ合いに欠かせない歌唱教材としての認識を新たにしている。

そこで、手遊び歌についての歴史や特徴など研究を深めて、保育現場ではどんな歌がどのように歌われていて、指導されているのかを保育者に対して調査を実施して、分析することで保育教育での指導の参考にしたいと考えた。また別の視点として、声楽の指導で研究課題としている、歌う時の音程の正確さと手遊びをつけるタイミングの問題などについても再度、考える機会にしたいと思った。

以上より、論文では手遊び歌の歴史変遷を研究すること、保育現場での手遊び歌の活用状況を調査すること、そして保育者養成での歌唱指導での教材選択や指導方法を研究することを目的として本テーマを設定した。

そこで、手遊び歌を保育園、幼稚園での保育教育の中で、より豊かな歌唱指導教材として育ててもらいたいとの希望を具体的にしていき、保育者養成の声楽の歌唱指導で学生に伝えていきたいと考える。

I. 子どもの歌での手あそび歌の変遷をたどる

[1] 保育教育における手遊び歌について

いつの頃から手遊び歌と呼ばれ、保育現場で、子ども

達の放送番組でも、また楽譜集でも手遊び歌集として編纂され歌われており、手遊び歌は一般的になっている。しかし、手遊び歌といわれてきたのはいつ頃であったのか、と考えると、どうもはっきりしない。手遊び歌は突然に歌われだしたわけではなく、そこには言葉があり、子どもの存在があり、生活があり、遊びがあり、音楽があり、と考えると、やはり、「わらべうた」に発しているのではと考えられる。

手遊び歌には日本の言葉で子どもたちの遊びがあって、話したり歌ったり身振り手振りとかえたりして歌う点で、「わらべうた」と同様のものがある。時代の流れで環境も変わり、子どもたちの遊びも変化していく中で現実として、何か「わらべうた」では物足りないものがある、遊びも発展していき、手遊び歌という名称が生まれて、現在まで継承されているのではないかと推察する。

手遊び歌には、江戸時代から歌い継がれるわらべ歌の持つ特徴である、一人で、また二人で、集団でと遊んで歌う、身体を使ったり道具を使ったりして歌う、子どもの発達に合わせて変化させ、歌って遊べるなどと身体表現と歌とが同時に楽しめるものがある。

「わらべうた」は少し歌詞が古いなどといったことから歌われることが少なくなっている。日本の伝統を伝承していく意味でも「わらべうた」をうたいつぎ、手遊び歌とをつなぎながら、指導していく努力が必要である。そこには何よりも子ども達の遊びの歴史、育った歴史が歌としてあるからである。そうした認識から保育者養成校では乳幼児期での保育教育に取り入れていくことが大切ではないかと考える。尚、小学校教育での音楽教科書には「わらべうた」は常に掲載され続けていることを念頭におきたい。

次に手遊び歌の変遷について調べていくにあたって、次の文を引用して手がかりとした。

“ヒトは太古から、生活の中でさまざまな形で、音

楽と関わってきた。その様相を探究するにはいくつかの方法があるが、その一つは、古代から現代までの歴史的な時間の経過の中で、諸文明の音楽がどのように変遷したかを調べることであり、他の一つは、いま地球上の各地に生活している諸民族はそれぞれ、どんな音楽を所有しているかを明らかにすることである。”

①柴田南雄『音楽史と音楽論』1
頁より

以上の引用文を参考として、日本の伝統として歌われてきた「わらべうた」について特徴と変遷をたどることとする。

[2] わらべうたの定義

本論文では、次の文献より引用した文章を以て、「わらべうた」の定義とする。

“わらべ歌は子どもたちが遊びなどの生活の中で口伝えに歌いつぎ、作りかえてきた歌。作者は問題にされず、遊び仲間などのグループによって伝承されるなどの性質をもち、言わば子どもの民謡である。(中略)古いわらべ歌には自然現象や民俗行事に関する歌も多く見られるが、もっとも中心になるのは遊びの歌で、まりつき、なわとび、各種の鬼ごっこ、お手玉、絵かき、はねつき、お手合せ、じゃんけん、おはじきなど多くの種類の歌がある。また人の悪口をいい、からかったり、はやしたてたりする歌、数え歌、しりとり歌、早口歌、となえごとの歌などの種類もある。(中略)古くから伝えられたわらべ歌は、近代的風俗が落ち着いてきた大正期からかなり減びたり変質したりしてきたが、一方新しい歌も絶えず作られ、古い歌が作りかえられるなどして、現在でも全国でいきいきと歌われている。しかもその大部分は音階、リズムなどもっとも基本的な音楽的要素の点で全く伝統的である。一部に音楽教育の影響によるヨナ抜き音階のものなどが見られるに過ぎない。つまりわらべ歌は大人の民謡の音楽的特徴のうちでもっとも基本的なものをもっとも単純明確な形で示しており、伝統音楽の研究上または音楽教育上きわめて重要である。”

②『標準音楽辞典』1454-1455
頁より

次に童謡・わらべうたについて引用して新しい視点での西洋的な解釈も含めたものとして定義としていく。

“大人が子どものために、即興的あるいは作曲法に従って作った歌、および子どもが自分たちで搜索して伝承してきた歌を指す。歌の形をしているもののほかに、韻を踏んだ詩行や格言詩も含まれる。というのも、この領域においては音楽と言語の境界がことのほ

か流動的であり、歌詞だけが伝承されている数多くの童謡が、本来、歌と格言詩のどちらの機能をもっていたのか今では解明できないからである。(中略)

大人が童謡にかかわるのは、とくに教育的な意図があるとき(子どもを愛撫するときや慰めるときの詩、しつけの詩、数え詩、アルファベットの詩、「子育て」詩、または子どものための宗教歌)、子どもと遊ぶとき(ブランコのように体を揺らしたり、お馬さんごっこで遊ぶときの歌、冷やかしの歌、からかいの歌、語り歌)、伝統的なしきたりに関係するとき、そして詩の言葉や構造を練り上げるときである。”

⑦『メッツラー音楽大事典』(童謡・わらべうた)より

わらべうたは子どもが心地よいと感じるリズムに、日本語をのせて、昔から歌い継がれてきたもので、わらべうたを楽しむ中で、「聞く」「話す」といったことばの土台ができ、ことばの抑揚からも音楽的発達を促してきた。また遊びから人と人との交わりを作ってきた。

[3] わらべうたの分類

そこで幾つかの分類法を次にあげる。

注一 手遊び歌と掲げてある箇所※を入れて手遊び歌に関連しているものとした一

(1) 「わらべうた」の分類

- 1) ・一人の動作が主となる遊び ※
- ・二人で行なう遊び
- ・集団で行う遊び

⑨尾原昭夫編『日本のわらべうた
＜室内遊戯歌編＞』284-286頁
より

- 2) ・となえうた
- ・絵かきうた
- ・おはじき・石けりのうた
- ・お手玉・羽根つきうた
- ・手まりうた
- ・なわとびうた
- ・じゃんけんうた
- ・お手合わせうた
- ・身体あそびうた ※
- ・鬼あそびうた
- ・子守うた
- ・年中行事うた

③小泉文夫編『わらべうたの研究
研究編』283-285頁 及び

④岩井正浩『わらべうた その伝

承と創造』5-9頁より

3) ・遊戯唄その一 ※

- ・子守歌
- ・天体気象の唄
- ・動物植物の唄
- ・歳時唄
- ・遊戯唄その二 ※
- ・囃し唄

⑥浅野建二『新講 わらべ唄風土記』23-24頁より

- 4) ・Songs of weather and sky (天体と天象の歌)
- ・Songs about animals (動物に関する歌)
 - ・Miscellaneous Play-songs (いろいろな遊戯の歌) ※
 - ・Narrative Songs (ものがたりの歌)
 - ・Battle-door and Ball-songs (羽根つき歌と手まり歌)
 - ・Lullabies (子もり歌)

⑧本城屋勝『わらべうた研究ノート』43-44頁より

以上の分類により考察すると、わらべ歌自体は一人で遊ぶ、二人で遊ぶ、集団で遊ぶといった定義があることが分かる。また遊びについても道具を使って遊ぶ、言葉で遊ぶ、身体を使って遊ぶ、といった遊びの定義を持っていることが分かる。また、4)の分類からは(ものがたりの歌)との分類が出ていて新しい。

次にわらべうたの分類の2)を参照して、現在の様子と考え合わせる。・絵かきうた・おはじき、石けりのうた・お手玉・羽根つきうた・手まりうた・なわとびうたなどは現在ほとんど遊び自体を見ることができなくなっている。・子守うた、については歌としては存在すること、伝統的な子守娘の仕事歌自体はなくなっている。・年中行事のうた、としては家庭・地域での衰退傾向がある。また、絵描き歌についても減少傾向をみる。鬼あそびうたは主に戸外で行う遊びで、住宅、交通事情の悪化、当然こどもたちの遊びの室内化を促進していった点もあり、その結果少なくなっている。・となえうた・じゃんけんうた・お手合わせうた・身体あそびうた、などの歌はいつでもどこでも、楽しんで遊べて口ずさめる点では歌いやすいので残っているようである。

[4] わらべうたから手遊び歌へ

岩井正浩によるわらべうたの分類より選択された、

身体あそびうた、についての解釈と分類を挙げて考察する。

(1) 身体あそびうたについての解釈

“身体の一部または全身を使って遊ぶうたを総称して『身体あそびうた』と呼びます。ただこの中から他の目的をもったうた、たとえば『お手合わせうた』や『なわとびうた』などは省きます。ところでこの『身体あそびうた』は、『となえうた』とともにわらべうたとは認識され難い面をもっています。しかし『身体あそびうた』は他民族の子供たちに共通し、しかも通じ合える最も手ごろなうたであります。このことは1983年に逝去された民俗音楽学者・小泉文夫氏の調査の回想にも見られます。小泉氏はわらべうたをその民族の最もプリミティブでベーシックな音楽構造を内包しているからでした。(中略)

となえうたは動作を伴わず、言葉もわからない。しかし『身体あそびうた』なら一人でも、遊び歌いながら示すことができるのです。”

④岩井正浩『わらべうた その伝承と創造』210頁より

(2) 身体あそびうたの分類

身体あそびうたも幾つかの種類があり6種に分けている。

- ・顔遊びうた—顔の表情がポイント—(上がり目下がり目、だるまさん)
- ・全身あそびうた(おしくらまんじゅう、なべなべそこぬけ、いろはに金平糖)
- ・指あそびうた
(子どもと子どもが一鬼あそび的性格を有する—ずいずいずっころぼし)
- ・手あそびうた
(おなべく—罰遊びとしての一、肉屋の兄さん—鬼あそび的性格を有する—)
(おせんべやけたかな—これには性格判断や罰ゲームがある—)
- ・身振りあそびうた—一種の身体で幼稚園や保育園でよく遊んでいる遊戯—
(ごんべさんのあかちゃん、聞いた聞いた、羅漢さん、大きな栗の木の下で、おはぎがお嫁に、もしもしかめよ)
- ・凶形とびうた—両足をそろえてとぶ遊び—(いろはに金平糖)

④岩井正浩『わらべうた その伝承と創造』210-211頁より

(3) 「わらべうた」の変化の推移

「わらべうた」の変化について文献よりの引用と

考察

1) 「わらべうた」の衰退的变化

“戦後殆ど街路上でもわらべ唄を歌いながらやる遊びの風景などは見たくても見られないようになった。その大きな原因は、なんとといっても時代の変化で、子供たちの遊びが一変したことが主因をなしているが、わらべ唄の中には、意味のわかりにくい古い言葉や、方言・訛語が多く、また物語形式の長い歌詞などもあって、新しい世代の子供たちがそのまま継承しにくいことも、確かに災いをなしていると思う。”

⑥浅野建二『新講 わらべ唄風土記』19頁より

“わらべ歌が伝承・伝播の過程で変容・再創造・断絶を繰り返す、つねにその時代に合った歌を作り出していくといった性格を有しているからである。現代は都市集中化で、多くの子どもが都市生活を行っている。その都市は夜間照明、道路のアスファルト化、通学手段の変容、広場の縮小化、川や林の消失、季節感の喪失で、以前の子どもの環境を大きく変えてきている。そのため天体気象や動植物の歌が衰退する条件は整っていった。

お手玉、手まり、そして20～30年前までであったおはじき、石けり、羽子突きも、現代の子どものわらべ歌には見当たらなくなった。わらべ歌は時代によってジャンルそのものの盛衰があり、遊びも変遷を重ねている。つまり生きているということに他ならない。”

⑤『子どもの歌の文化史 二十世紀前半期の日本』307頁より

以上の文献より分かるように時代の移り変わり生活様式の変化などと、共に「わらべうた」があったことが分かる。

2) 音楽的特徴と変化

○特徴

- ・リズムとしては付点リズムで歌うのに対して動作は一拍で展開する。
(子ども子どもが・あんたがたどこさ・たぬきさんなど)
- ・歌詞だけが本に掲載されて旋律は書かれていなかった。それは方言の抑揚を尊重したものである。
- ・音階は2音、3音、テトラコード4度枠の3音など日本音階に属する。
- ・遊びに合わせた呼吸でリズムがとれる。

○変化

- ・民謡音階の旋律の動きが主流であったわらべうたはヨナ抜き音階の西洋的旋律法が登場する。西洋的要素が導入されつつある一例として、長2度上行、長3度下行など西洋の長音階ででてくる。
- ・伝統的音階の減少が見られる。この要因は明治以降の学校音楽教育、マスメディアによる西洋音楽とそれをベースとした日本人の作曲による唱歌・童謡をはじめとする作品の影響が、子どもの音楽生活に大きく作用してきていることを物語っている。
- ・現代の子どもが〈となえ歌〉を数多く歌い、それらが学校唱歌や童謡といった既成曲の転用・替え歌や一部アレンジを含む一であり、1970年と1980年の調査・研究の例をみると、「わらべうた」を拡大して捉え、子どもの遊びで歌われる全てを対象としていることが分かる。

⑤『子どもの歌の文化史 二十世紀前半期の日本』309頁参照

以上を考察すると音楽的な特徴として西洋音階の導入が大きい変化となっていることが分かる。また1970年の研究調査ですでにわらべ歌を拡大してとらえていることが分かった。

(4) 手遊び歌についてのまとめ

今までの研究からここで手遊び歌とは何かをまとめると、現代版「わらべうた」になるのではないかと考えられた。手遊び歌は広い視点で生活の中で歌われた言葉や環境のものが、生活環境の変化、文化の変化に伴い、対応しやすいものとして残ったものとみる。

それは何よりも一番身近な手を使った遊びが中心となり身体の部位が増え、一人でも二人でも立っても座っても遊べて、また何歳にでも合わせることができることから、手遊び歌と題して展開してきたものと、本論文では位置づけし、現代版「わらべうた」との認識でもって進めることとする。

II. 保育現場での手遊び歌についての調査

[1] アンケート調査1 手遊び歌について

(1) アンケート調査の主旨

保育園・幼稚園を対象にアンケート調査を実施し、現在使われている手遊び歌の実態について調査して、歌や遊びの傾向を知ることが目的とした。

(2) 調査期間および調査方法

①調査期間：平成26年2～3月

- ②調査の対象：保育園・幼稚園の先生
- ③調査園数：全24園（保育園12園・幼稚園12園）
- ④調査した県：福岡県・長崎県・熊本県
- ⑤アンケート配布数：各園に4～20部配布。自由に回答してもらう。
- ⑥アンケート回収数：229部

(3) アンケート書式は先ず回答曲で分散しないために、回答法とし、選択した曲目は、わらべうた・日本の歌・外国の歌・作詞作曲が不明のものとジャンル分けをして65曲を絞って回答してもらった。回答法としては頻繁に歌っている曲に◎印、歌ったことがある曲に○印を記入してもらうこととした。他に、園で良く使われる曲を別項目で自由に書いてもらった。

(4) 調査結果と考察

1) アンケート調査1 手遊び歌について

ア. 図1についての頻繁に歌っている曲の上位10曲をあげる。

- 1位 トントンこぶじいさん 65%
- 2位 これくらいのおべとうぼこ 55%
- 2位 キャベツの中から 55%
- 4位 やきいもグーチーパー 53%
- 5位 大きな栗の木の下で 51%
- 6位 一本橋こちょこちょ 48%
- 7位 メロンパンのうた 41%
- 8位 一匹ののねずみ 39%
- 9位 さかながはねて 38%
- 10位 小さな庭 36%

イ. 図2について歌ったことがある曲の上位10曲をあげる。

- 1位 だるまさん 55%
- 2位 ずいずいずころばし 54%
- 3位 おちゃらか 53%
- 4位 かごめ 52%
- 5位 いとまき 52%
- 6位 あんたがたどこさ 51%
- 7位 げんこつやまの 49%
- 8位 あぶくたった 47%
- 9位 ごんべさんの赤ちゃん 45%
- 10位 アルプス一万尺 43%

以上のア. イ. の10曲ずつについて考察する。

ア. の頻繁に歌われる曲の特徴を挙げると、現在、特に人気のある曲で現代的で西洋音階であり、身近にある食べ物、動植物が材料になっている。曲も新しく時代を反映して歌われていることが分かる。

また、イ. の歌ったことがあるとされた曲は「わらべうた」がほとんどであった。この「わらべうた」は保育者自身も小さい頃から歌ったことがあるため、保育の中で自然のうちに指導していたものと考えられる。

図1・図2から考えられることは65曲中の上位10曲を見ても「わらべうた」の定番として伝承されてきたものと新しい手遊び歌とが上手に取り入れられている。

2) 自由記述回答

提示した手遊び歌65曲以外で、普段よく歌われている曲を自由に記述してもらったところ、外に266曲があげられた。その中で次のような曲が特に多かった。

- 1位 はじまるよ 8.7%
- 2位 三匹のこぶた 7.9%
- 3位 グーチーパー（とんとんこぶじいさん替え歌） 4.8%
- 4位 頭 肩 ひざ ポン 3.5%
- 5位 大きくなったらなんになろう 3.1%
- 5位 なべなべそこぬけ 3.1%
- 7位 のぼるよコアラ 2.6%
- 7位 ワニのとうさん 2.6%
- 7位 一本指の拍手 2.6%
- 7位 食いしん坊のゴリラ 2.6%
- 7位 八百屋のお店 2.6%
- 7位 お寺の和尚さん 2.6%
- 7位 おてぶしてぶし 2.6%

以上の10位までの曲は親しみのある手遊び歌があがっている。遊びもふくらんで歌って遊べるものである。知らない手遊び歌もあったので、今後もっと関心をもって、常に現場の情報を得たいと思った。

[2] アンケート調査2 手遊び歌の指導について

(1) アンケート調査の主旨

現在、過去保育士・幼稚園教諭を対象にアンケート調査を実施し、園児に対する手遊び歌の指導について調査した。

(2) 調査期間および調査方法

- ①調査の期間：平成26年7～8月
- ②調査の対象：保育士・幼稚園教諭22名（経験者を含む）
- ③アンケート配布数：22部
- ④アンケート回収数：20部

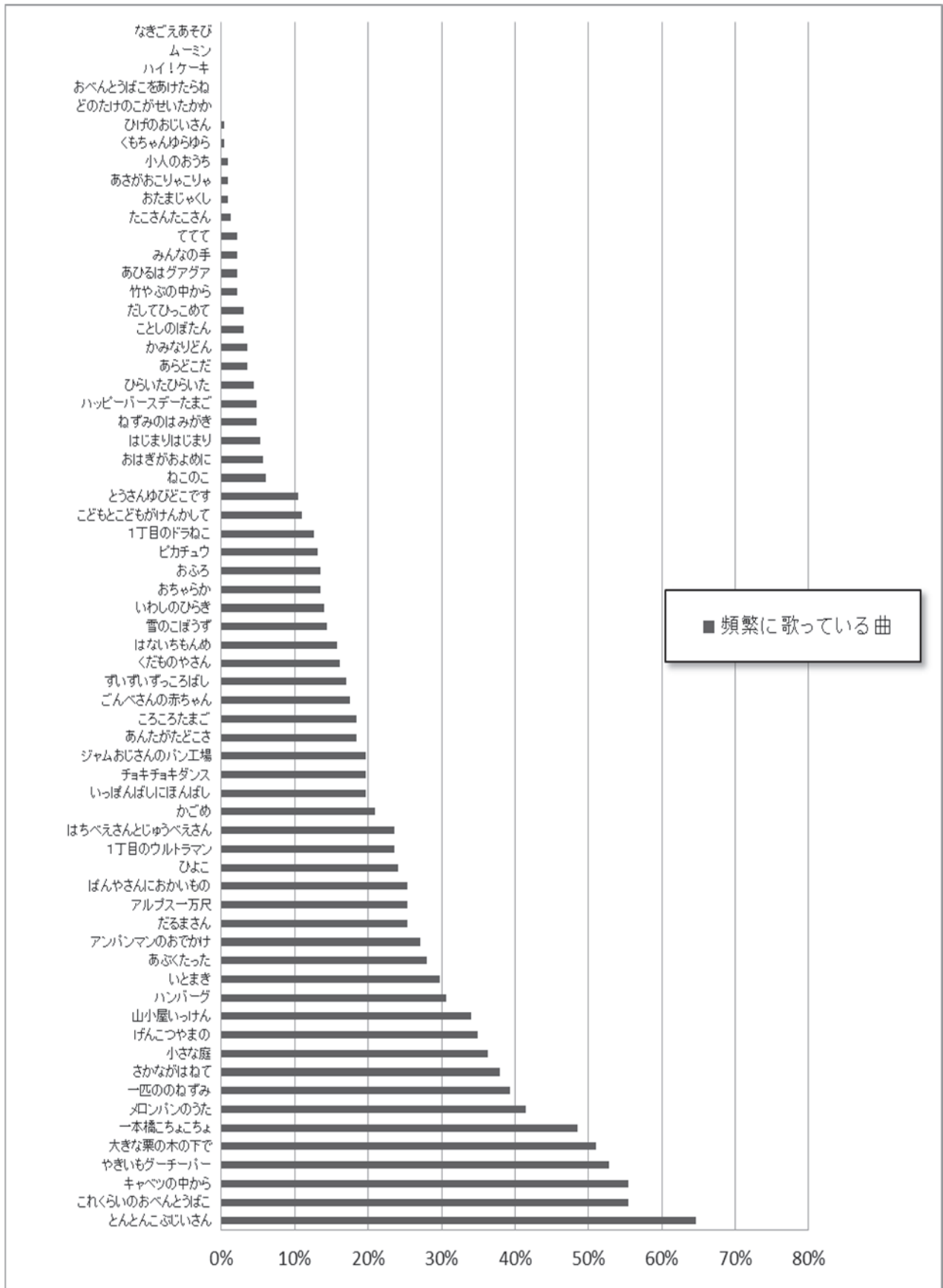


図1 頻繁に歌っている曲

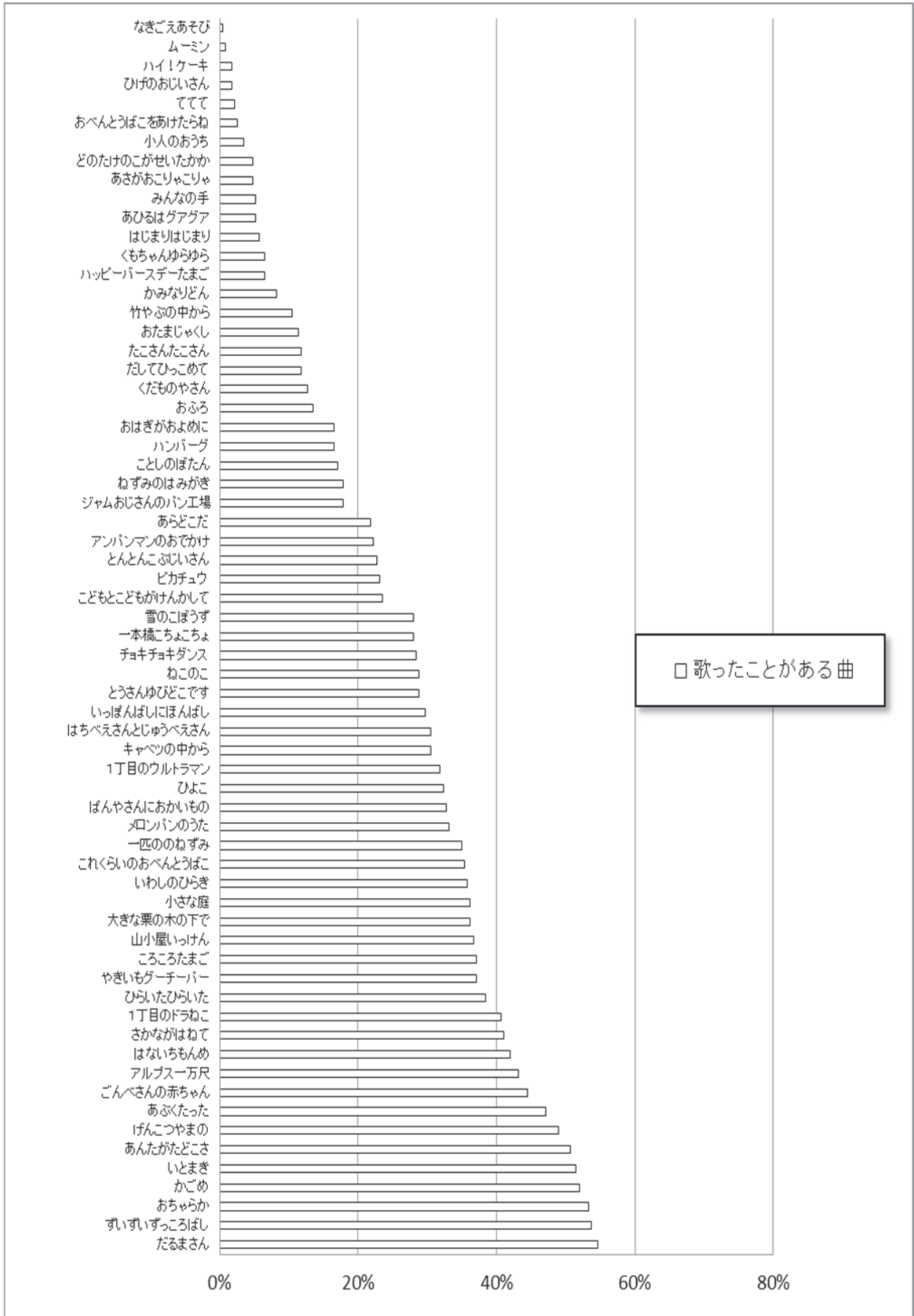


図2 歌ったことがある曲

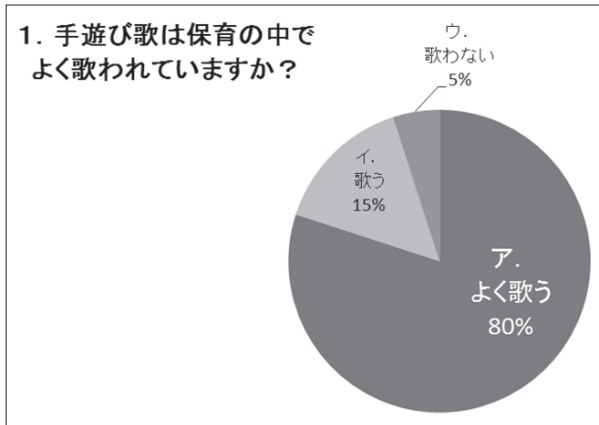


図3 設問1 手遊び歌は保育の中でよく歌われますか？

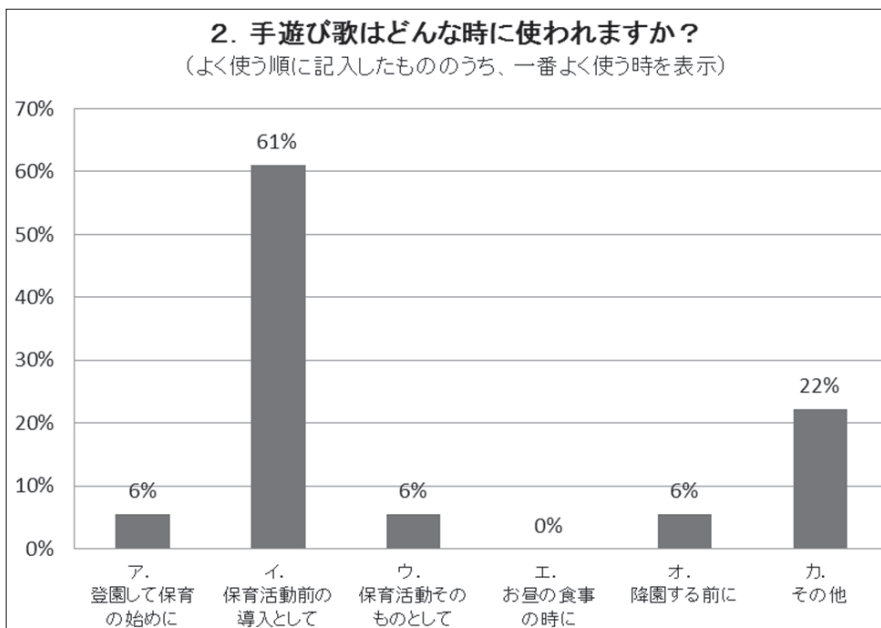


図4 設問2 手遊び歌はどんな時に使われますか？

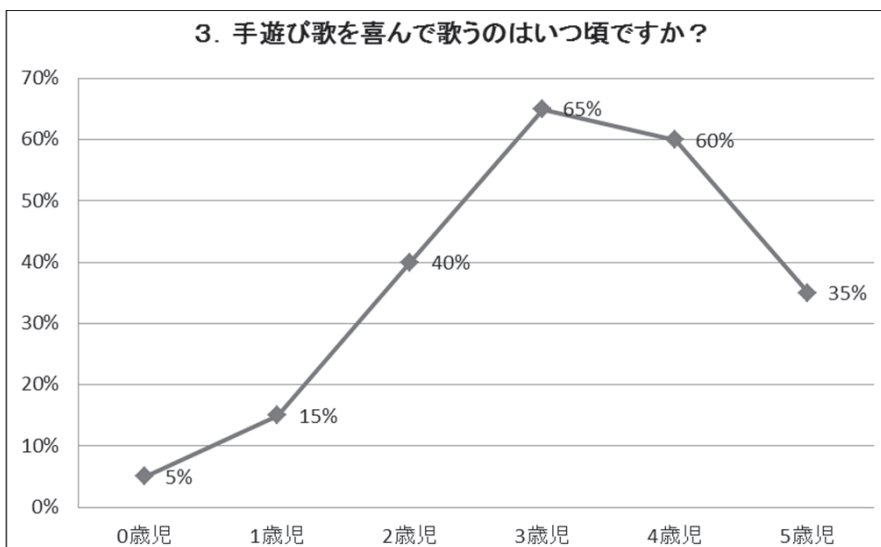


図5 設問3 手遊び歌を喜んで歌うのはいつ頃ですか？

⑤回収率：90%

(3) 回答結果と考察

次のグラフは、設問1の手遊び歌は保育の中でよく歌われますか？に対する回答である。「ウ. 歌わない」が5%との結果が出ているが、但し書きとして、年長児クラス担当が多い為とあった。

次のグラフは、設問2「手遊び歌はどんな時に使われますか？」に対する回答である。

設問2に対してはイ. の保育活動の導入としての回答が61%で非常に多い結果となった。これは再認識することとなった回答結果であった。また、カ. その他の記述を挙げると・絵本を読む前・絵本、紙芝居の前に集中させたり、気持ちを落ち着か

せたりするとき・少しの空き時間・誕生日会などの行事の待ち時間であった。よって内容としては保育の導入に入る内容であった。そのため83%が保育の導入として使われていることとなる。

次のグラフは、設問3の手遊び歌を喜んで歌うのはいつ頃ですか？に対する回答である。

設問3に対しての図5を考察すると3歳児が一番よく歌うとのことで65%であった。これは0歳から3歳までの間での手遊び歌の経験も大切であったと伺える。その後、4歳、5歳と下降していくのは若干さびしい結果である。手遊び歌を楽しんで、もっと遊んでもらいたい年齢であると思えた。

次は設問3の②で、またその様子を先生のご経験からお書きください。についての記述をまとめる。

- ・喜んで行う
- ・保育者に注目し集中する
- ・一生懸命真似をする
- ・更に歌遊びを発展させていく

以上より、子どもたちの楽しんで行う様子は共通しており、また、知っている曲・初めて歌う曲には関係なく、積極的に歌い遊んでいる。

次は設問3の③で、手遊び歌を指導されたときの先生の感想をお書きください。についての記述を

まとめる。

- ・集中力を養え、活動がスムーズになる
- ・一緒に楽しめて嬉しい
- ・もっと歌を教えたい

以上のように、子どもと一緒に楽しむことで意欲が湧いてくる保育者の喜びと、活動を進めやすいという利点が挙げられている。

次は設問4の手遊び歌を保育に入れる時の“ねらい”や“子ども達に伝えたいこと”はなんですか。についての記述をまとめる。

- ・導入として、活動をスムーズに
- ・集中力をつけさせる
- ・情緒の安定のため
- ・手遊びうたが楽しいものであるということ表現することの楽しさ
- ・昔ながらの歌
- ・コミュニケーションのひろがり
- ・表現力・想像力を養う
- ・リズム感の育成

以上のように、様々な記述がみられるなかで、楽しさという言葉はどの記述にも共通してみられた。

次のグラフは、設問5の手遊び歌を保育に取り入れることはいいことだと思いますか？に対する回答である。

設問5に対しては保育に取り入れることはいいことである、との回答は100%であった。このことから、手遊び歌について、保育教育での指導法の研究が重要であると考察した。

次は設問6の手遊び歌をすることで歌がよく歌えるようになると思いますか。そのように感じられたのはどのような時ですか。についての記述をまとめる。

○手遊び歌をすることで歌がよく歌えるようになる

と思いますか、についての記述。

- ・歌に対する興味が培われる
- ・動作があることでリズムがとりやすい
- ・歌詞が覚えやすい
- ・毎日繰り返すことで良く歌えるようになっている
- ・一日何度か取り入れることでよく歌えるようになる
- ・無理にリズムや音程を指導をするのではなく、手遊びを通して自然と身につけていく
- ・子どもにとって遊びの要素が大きいいため、上手になるとはいえないが、自発的に声をだせるようになる
- ・歌うというよりも、集中させるときや、歌遊びで使う
- ・手遊びうたと歌をよく歌えるようになることは違う。

以上のように、保育者によって様々な意見がみられた。手遊び歌を歌うことが歌を歌うことへの発達、成長につながるという考えと、手遊び歌と歌がよく歌えることは違うという二つの考えがあった。

○よく歌えるようになったと感じたときについての記述。

- ・子どもが1人でも歌い始めたとき
- ・活動に合わせて替え歌をしたとき
- ・まだ言葉も少なく歌えないこどもも参加しているとき
- ・手遊び歌を取り入れているクラスとそうでないクラスでお遊戯会で差があったとき

以上のように、子どもが手遊び歌で自発的に遊んだり、発展させたり、また、クラス同士で客観的に比較したときに、成長を感じている。

また、設問6の手遊び歌をすることでよく歌えるようになると思いますか。について別に記述があった。

○別の記述より

- ・歌まで…と深く考えたことはなかったが、確かにそうかもと思った。

以上、アンケート調査2について全体を考察していくと、保育者養成校で学生と接していても、手遊び歌と歌は別物だと感じている学生は多い。おそらく、手遊び歌が歌うことの始まり、音楽教育の始まりと考える機会もなかなか無いのが現状である。しかし、歌の指導ということより、歌うことで子ども達には基本的な音楽の様々な要素が自然と身につけていくのである。そして、その様々な要素こそがまた更なる歌うことや音楽そのものへ

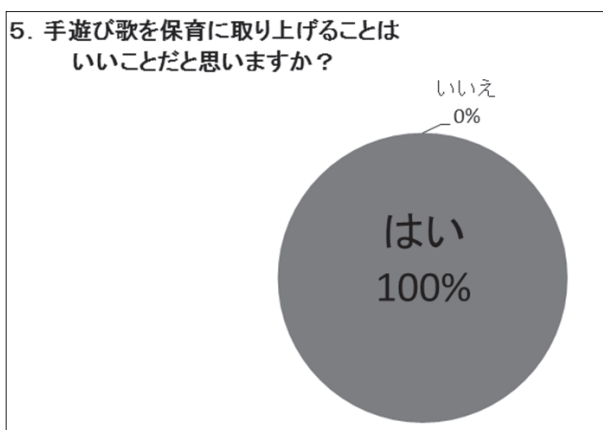


図6 設問5 手遊び歌を保育に取り入れることはいいことだと思いますか？

の成長・発達へと関わってくるため、手遊び歌と歌うということは切り離すことはできない。

また、設問2では、多くの保育者が手遊び歌を導入として使っている結果であったわけだが、保育現場では、勿論、活動をスムーズに進められる手段として必要ではあるが、歌うこと・音楽を楽しむという意識がまず大切であると思われる。

保育者の意識で手遊び歌のありかたも違ってくる。保育教育での一つの教材、手段としての手遊び歌ではあるが、それが、保育者側のためではなく、子どもたちの成長、発達のための手段として子どもも保育者も一緒になって楽しんでもらいたい。

また加えて、園でのインタビューで得た、現場でのコメントを参考としてあげる。

手遊び歌は保育の導入としていて、何より楽しんでやっている。歌や手遊びはお互いを見ながら、見よう見まねだったり、友達で教え合ったり、先生も教えてやりながら、自然に覚えている。先生の持ち味も出て子ども達と触れあうことができる。手遊び歌は自由に替え歌にして、皆で楽しんでいる。

III. まとめ

今回、手遊び歌についての調査によって、保育現場での活用状況などを知る機会を得た。それは保育者養成校での声楽指導のみでは分からない貴重な結果を得ることとなった。貴重な結果の一つは、保育の場で手遊び歌が非常に良く歌われていることと、手遊び歌は保育の導入（保育活動の準備として良く歌われる）として使われることが多いことが分かったことである。

また、文献研究により、手遊び歌は「わらべうた」からの流れであることが分かった。手遊び歌について、歴史上の流れを学ぶことができたことは保育者養成校の指導者として意識を変えるものであり、それは、日本の伝統音楽からの視点をもって考えることの重要性と、生活する中で生まれ、育てられた「わらべうた」と手遊び歌とは、言葉の抑揚やリズム感や手遊びの動作などとの関連を見直す機会となった。また、民謡の最初の出発点であると定義された「わらべうた」と、「わらべうた」の流れにある手遊び歌とは、これからも歌い継いでいかなければならない大切な歌のジャンルとして位置付けることが出来た。

また、手遊び歌を「わらべうた」の現代版としてみても、人々の生活の中で子ども達の成長の中で生き生きと歌われ、語られ、遊ばれることはとても重要であると思われる。音楽の伝承としても、子ども達が自然に親しんで、夢中になって歌いながら遊ぶ姿には、音楽的成

長を育むことのできる貴重な機会であり、貴重な歌唱指導教材であることも認識した。

今回の調査結果から保育現場での手遊び歌は導入として使われることが多いことが分かった点では、導入としてだけでなく、保育時間での指導教材として、手遊び歌を採用して戴きたいということを提唱したい。

また、手遊び歌は“あそびが第一である”ことが文献や調査から分かったが、遊びを通しての歌唱指導としていくことも一つの方向であると考えることができた。それは手遊び歌は無理な動作も少ないことから、いつでもどこでも、友達同士で、親子で、保育者とでと共に歌って楽しめることが特徴であることから、むしろ歌唱を推進していくことにも繋がると理解した。

ただ、歌唱指導者として考えた場合についてだが、歌の伝承法としては口伝と共に楽譜による継承があるが、遊びが第一であるとの認識からは口伝が主になると思われるが、楽譜による伝承は文化の伝承や保存として必要不可欠である。

そこで、その伝承する時の楽譜としては音楽と手遊びの振りも同時に示しておく必要があると思われた。そこでそうした楽譜の整理をすることも私たちの今後の課題であると思えた。そして楽譜で伝承していく場合、読譜力が必要であるために歌唱力の習得が大切となり、そこで私たちの保育者養成での歌唱指導の役割となると再認識した。

手遊び歌は替え歌にしたり、遊びを発展したりと多様に変化していくことは推察されるが、それはそれで、手遊び歌（現代のわらべうた）の持っている歌の最大の特徴であると考えて楽しみたい。気持ちに合わせて話すようにして歌いながら、手遊びをつけると、リズム感（呼吸や間）を分かり合うことができる。そのことから、手遊び歌は音楽指導の出発点に位置していることが分かる。

ただ、時代の流れで変化していく手遊び歌の種類は多く、多種多様であることから、音楽自体も幅広いジャンルにわたっている。ここで、私たちが声楽指導での課題としている歌唱指導について振り返ると、音楽的には、音楽の三要素であるメロディ、リズム、ハーモニーを念頭において指導しているのと、旋律の正確さを得るために発声法が重要なため、個々にアドバイスをしていることが挙げられる。しかし、手遊び歌を歌いだすと手遊びに夢中になってしまって、旋律が正確に歌えないという課題がでてくる。卒業後、先生となった場合、模範唱は必然であり、保育教育での音楽的環境にとって重要なものであると考えられるので、いつも安定した歌唱力をするように努力をしてもらいたいと思っている。

言葉とリズム（旋律）と振りとはが一体化して手遊び歌

は成り立っている点からも手遊び歌を歌うことは歌唱力習得にも良い教材である。これは子どもたちにも同様に言えることで、しっかり歌って遊んでもらいたいと願う。

遊びながら歌われる手遊び歌だけに、子どもたちと共に楽しめる保育者となって、手遊び歌の輪を広げていくと欲しい。最後に、保育者養成での指導者としては、学生が歌嫌いにならないことを念頭に置いた指導をしていくこと、歌うことが楽しいと思えるような歌唱指導をしていくことの大切さを、手あそび歌の研究を通して改めて認識している。

謝 辞

幼稚園保育園の園長先生を始め、諸先生方にはアンケート調査等ご協力いただき貴重な時間と貴重な資料を提供いただきましてありがとうございました。ここに謹んでお礼を申し上げます。

参考文献・引用文献

- ① 柴田南雄『音楽史と音楽論』岩波書店（2014）p.1。
- ② 『標準音楽辞典』音楽之友社（1968）pp.1454-1455。
- ③ 小泉文夫編『わらべうたの研究 研究編』稲葉印刷所（1969）pp.283-285。
- ④ 岩井正浩『わらべうた その伝承と創造』音楽之友社（1987）pp.210-211。
- ⑤ 『子どもの歌の文化史—二十世紀前半期の日本—』第一書房（1988）pp.307-309。
- ⑥ 浅野建二『新講 わらべ唄風土記』柳原書店（1988）p.19。pp.23-24。
- ⑦ 大角欣也ほか『日本語版 DVD-ROM メッツラー音楽大事典』教育芸術社（2006）
- ⑧ 本城屋勝『わらべうた研究ノート』無明舎出版（1982）pp.43-44。
- ⑨ 尾原昭夫編『日本のわらべうた<室内遊戯歌編>』社会思想社（1972）pp.284-286。
- ⑩ 小泉文夫『子どもの遊びとうた わらべうたは生きている』草思社（1986）
- ⑪ 齊藤二三子『おもしろ手遊び指遊び』ススキ出版（1986）
- ⑫ 須川久『音楽であそぼう手あそび・踊り・歌あそび』風貌社（1981）
- ⑬ 奥村美恵子編『手あそび指あそび』共同音楽出版社（1983）
- ⑭ 鈴木恵津子編『うたっておどっておもちゃ箱2』教育芸術社（2011）